

# ネコの魔法

ネコとの出会いは意外に遅く、高校生になってからだ。京浜工業地帯の蒲田で育ったこともあり、それまでネコといえば道を横切るノラくらいだった。

同級生の家に遊びに行った時のこと。彼女の家の内外には二八匹のネコがいた。そのうちの二匹を彼は肩に乗せ、ネコの顔を間近に見せてくれた。ご自慢のネコだったのかもしれない。その時、まったく考えてもいなかったことが僕の身体に起きた。目の周りが急に熱くなり涙が溢れてくる。焦った。ネコを見て泣いたなど格好が悪くて説明出来ない。何とか彼が振り向く前に涙をぬぐった。何に感動したのか、大きな瞳にやられたのか、いや、可愛さだけではない。どうやら一瞬でネコの魔の手に落ちた……もとい、魔力に惹かれてしまったらしい。自分と違う生命を身体が震えるほど愛おしく感じたことも初めてで、ただただ、衝撃的だった。あれから、半世紀近くが過ぎた。現在、NHK BSプレミアムで「岩合光昭の世界ネコ歩き」という番組を作っている。これまで五年間で訪れた国は四〇カ国ほど。長年、ネコを探していたら、基本的にヒトの住むところには必ずネコがいると

## 岩合光昭

プロフィール  
1950年東京都生まれ。動物写真家として世界中で野生動物を撮影し、1986年には日本人写真家として初めて「ナショナルジオグラフィック」誌の表紙を飾る。ネコの写真も絶大な人気をほこり、「ねこ」「ねこ歩き」などの写真展が全国で開催される。写真集は『おきて』（小学館）、『ふるさとのねこ』（クレヴィス）など多数。

考えるようになった。北はノルウェー、南はペルーまで、ネコが暮らす村や町を訪ねている。世界遺産に登録されている土地や建物の中でも、そこで暮らすネコを見つけて撮影をする。撮影許可を得るのが難しい場所でも、「ネコ」という不思議と許可が下りてしまうことが多々ある。それがネコというものなのかもしれない。

撮影時は、ほとんど這いつくばっている。ネコの視線になるために、その高さでカメラを構えるからだ。その甲斐もあるようで、番組を観てくれるネコが多く、制作ディレクターは世界一ネコ視聴率の高い番組だと豪語している（笑）。地面すれすれにカメラを構えることで、土地の色や質が見えてくる。道や建物の建ち方、ヒトの足元も見えてくる。ネコを通して村や町が見えてくる。

先日、「ネコは家畜化されたのではなく、自らヒトに近づいて来たのではないか。何故なら遺伝子を変化した形跡がない」と学者が発表した。ネコは野生を残しながら、私たちと寄り添う。ヒトの思い通りにならないネコに、会うたび魔法をかけられて、これからも付き合っていくのだと思う。

## 月刊 みんなぱく

1月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>ネコの魔法</b><br/>岩合 光昭</p> <p><b>特集 ねこ猫 ネコ</b></p> <p>2 ネコ歩きで世界を横切れば<br/>吉岡 乾</p> <p>4 エジプトのネコの女神「バステト」<br/>肥後 時尚</p> <p>5 猫をかぶった人形たち<br/>井上 章一</p> <p>6 国芳と猫<br/>津田 卓子</p> <p>7 野生からペットへ——ネコと人の共存を求めて<br/>池谷 和信</p> <p>8 黒猫と魔女<br/>小林 繁子</p> <p>9 戊年で絵馬でネコ<br/>内田 吉哉</p> | <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/><b>聴導犬は人生のパートナー</b><br/>飯泉 菜穂子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/><b>狼男</b><br/>池上 俊一</p> <p>16 新世紀ミュージアム<br/><b>記憶の場所——寛容と社会的包摂</b><br/>ANFASEP 記憶博物館「繰り返されないために」<br/>関 雄二</p> <p>18 手芸考<br/><b>服のパターン、手芸のパターン</b><br/>平芳 裕子</p> <p>20 ながなんちゃ<br/><b>名は星をあらわす (?)</b><br/>三尾 稔</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|